

P1-19 肺の多形癌 (pleomorphic carcinoma) の画像所見と臨床像の検討松浦 正名¹・土屋 智²・懸川 誠一³・菅野 雅之³・川島 修²¹独立行政法人 国立病院機構 西群馬病院 放射線科; ²独立行政法人 国立病院機構 西群馬病院 呼吸器内科; ³独立行政法人 国立病院機構 西群馬病院 呼吸器外科

【目的】肺原発多形癌は、1999年 WHO 分類第三版において登場した比較的新しい疾患概念である。日本肺癌学会編肺癌取り扱い規約 (2003年 10月改定第6版) で肺の多形癌は組織学的に紡錘細胞や巨細胞を 10% 以上含む扁平上皮癌、腺癌、大細胞癌あるいは紡錘細胞、巨細胞のみからなる低分化な非小細胞癌と定義された。多形癌は全肺癌の 0.3% を占める頻度の少ない腫瘍である。その画像所見についてはまとまった報告はみられない。CT 所見と臨床経過について検討した。【対象・方法】対象は 1981 年から 2003 年 4 月までに、当院で切除した肺癌 1095 例中、病理組織学的に多形癌と診断された 5 例 (0.5%) で平均年齢は 61 才、男 3 名、女 2 名である。主訴は血痰が 2 例、背部痛、咳と痰、検診発見がそれぞれ 1 例であった。検討項目は腫瘍の大きさ、辺縁の性状、spicula の有無、周囲への浸潤の有無、中心部壊死の有無等について CT、病理所見を検討した。【結果】腫瘍占拠部位は右 S2、右 S8、左 S5、左 S6、左 S10 であった。CT 所見は長径 36~75mm; 平均 55mm であった。辺縁の性状は整が 2 例、やや不整が 3 例であった。腫瘍の境界はすべてで明瞭、spicula は 1 例のみ認められた。周囲への浸潤は心嚢壁 1 例、肋骨 1 例、葉間胸膜を越えて上葉が 1 例であった。Air-bronchogram は全例で認めなかった。造影後の染まり方から腫瘍内部の壊死部分が明らかなもの 2 例、疑われたもの 2 例、なしが 1 例であった。腫瘍の末梢に出血によるスリガラス状陰影が 1 例でみられた。病理学的に浸潤は心嚢壁 1 例、肋骨 1 例、胸膜 1 例、葉間胸膜を越えて他葉へ浸潤が 2 例でみられた。術前病期で T2 と診断した 3 例中 2 例と T3 と診断した 2 例中 1 例は同葉内転移や胸膜播種のため病理組織学的に t4 と診断された。全例が再発し、多臓器転移が 2 例、胸郭内再発が 3 例、3 例は 1 年以内に再発にて死亡し、2 例が担癌生存中である。【結論】肺多形癌は有症状で受診することが多い。境界は比較的明瞭であるが胸壁、縦隔等周囲臓器への浸潤傾向が強い。中心部の壊死を反映して造影剤での染まりの低い傾向がみられた。術前の病期診断においては浸潤傾向の強いことを考慮する必要がある。

P1-20 肺 pleomorphic carcinoma 切除例の臨床像および CT 所見の検討阿比留 一¹・芦澤 和人¹・山口 哲治¹・福島 文¹・永安 武²・赤嶺 晋治²・中村 昭博²・田川 努²・林 徳真吉³¹長崎大学病院 放射線科; ²長崎大学病院 呼吸器外科; ³長崎大学病院 病理部

【背景】肺 pleomorphic carcinoma は低分化な非小細胞癌であり、紡錘細胞あるいは巨細胞が少なくとも全体の 10% を占めるものとして 1999 年の新 WHO の分類で提唱された腫瘍組織型である。我々の知る限りその画像所見のまとまった報告は少ない。今回 pleomorphic carcinoma の臨床像および CT 所見に関して検討した。【対象】1997 年以降の手術症例で病理学的に pleomorphic carcinoma と診断された 17 例。男性 13 例、女性 4 例、年齢 32~81 歳 (平均 65 歳) である。【結果】発見動機は、11 例が検診で、他の 6 例は胸痛、血痰、発熱、全身倦怠感などである。喫煙歴は 11 例にみられた。術後病期分類は IA 期 2 例、IB 期 3 例、IIB 期 4 例、IIIA 期 2 例、IIIB 期 3 例、IV 期 3 例であった。リンパ節転移は 3 例にみられた。17 例中 15 例が末梢側、2 例が中枢側発生であり、右上葉 7 例; 右下葉 3 例、左上葉 4 例、左下葉 3 例であった。最大腫瘍径の平均は 54.7mm (19~101mm)、内部は単純 CT では 9 例が不均一だったが、14 例で不均一に造影され、明らかに壊死が認められたものは 11 例だった。内部に air space が 2 例に、石灰化が 1 例に認められた。境界はいずれも明瞭で、辺縁に関しては notch 9 例、spicula 5 例、胸膜嵌入 3 例であった。周囲の気腫性変化は 6 例、すりガラス影は 5 例、胸膜肥厚は 11 例に認められた。17 例中 9 例に胸膜外浸潤が認められ、主な浸潤部位は胸壁 7 例、横隔膜 2 例 (1 例は肝臓への浸潤もみられた) であった。【まとめ】Pleomorphic carcinoma は比較的高齢の男性喫煙者に多くみられた。腫瘍は境界明瞭で大きなものが肺末梢に存在することが多く、CT では大部分が不均一に造影され、病理学的に広範な壊死が認められた。半数以上に明らかな胸膜外浸潤が認められ、縦隔あるいは横隔膜由来の病変と、画像および手術所見で鑑別が困難なものがあった。